

## 羽衣説話考

### ——日中朝に伝承される説話の比較——

鈴木 沙都美

#### はじめに

日本には、きわめて古い時代から数多くの伝説・説話が伝承されている。

羽衣説話もその一つである。衣を纏い天から舞い降りた天女とその天女を妻あるいは娘にと望む人間との物語で、その多くが神話や民話として語られている。羽衣説話の一部分では、天女が白鳥に変身することから白鳥処女説話とも呼ばれ、類似する説話は世界各地に広く分布している。水野祐氏はこの説話の分布について著書『羽衣伝説の探求』の中で「北方の伝説と南方の伝説とは、その内容を構成する要素のうえに変化と異同が見られるので、いくつかの伝播経路が考えられるのである」（先掲書／四頁）と示唆している。

まず本論に入る前に、世界における羽衣説話の分布の伝播経路について述べておきたい。

すでに言われているように、羽衣説話あるいは白鳥処女説話と称される説話は世界中きわめて広範囲に分布しているが、それがいつ、誰によって伝承され始めたものなのか、その起源を明確にすることは今日ではほぼ不可能だと言われている。しかし、羽衣説話はヨーロッパをはじめ、東南アジア・中央アジア、中東にもその類型と見られるものが残されている。

水野氏は、これら説話の伝播経路には①インド・ゲルマン民族の移動による伝播②中国から朝鮮、日本へ至る中央圏

伝播経路③朝鮮を介さない北方圏伝播経路④南方圏伝播経路の四つがあると述べている。(先掲書／一九二頁)

氏は中国や朝鮮の説話の形成に関わる北方圏伝播経路は白鳥処女説話の流れを汲み、中央伝播経路はインドの仏教思想や天人思想を受容していると考えている。この二つの経路は日本の羽衣説話の形成に深く関係し、影響を及ぼしていると見ていいだろう。

このことを踏まえて、私は中国・朝鮮・日本に伝承されている羽衣説話を比較し、日本の羽衣説話にはどのような特徴があるのかを論じていこうと思う。

## 第一章 中国・朝鮮の羽衣説話

### 一、中国の羽衣説話

中国に伝承されている羽衣説話の中でも、文献に残るもので最も古いものと言われているのが、六朝時代(三〜六世紀)に成立した『玄中記』<sup>(梁)</sup>所収の「姑獲鳥」である。

姑獲鳥とは妊婦が死んで化した怪鳥のことで、人の子を攫つて自分の子として育てるといふ。鬼鳥とも呼ばれ、干しである子どもの服に塵埃を落として病気にしてしまうことから凶鳥として恐れられたという異伝も残っている。『玄中記』では姑獲鳥の伝承に中国の羽衣説話の源流である予章郡の話が語られている。

昔、予章郡男子、見<sub>三</sub>田中有<sub>二</sub>六七女人<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>是鳥<sub>一</sub>、匍匐往、先得<sub>二</sub>其毛衣<sub>一</sub>、取藏<sub>レ</sub>之。即往就<sub>二</sub>諸鳥<sub>一</sub>、諸鳥各去就<sub>二</sub>毛衣<sub>一</sub>、衣<sub>レ</sub>之飛去。一鳥独不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>去、男子取以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>婦。生<sub>三</sub>三女<sub>二</sub>。其母後使<sub>二</sub>女問<sub>レ</sub>父、知<sub>三</sub>衣在<sub>二</sub>積<sub>レ</sub>稲下<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>之、衣而飛去。後衣<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>迎<sub>三</sub>三女<sub>二</sub>、三女兒得<sub>レ</sub>衣亦飛去。今謂<sub>二</sub>之鬼車<sub>一</sub>。

【昔、予章郡のある男が田園に六、七人の娘がいるのを見つけた。正体が鳥であるとは知らず、這いつくばり前に進んだ。まず毛衣を見つけると、取つてこれを隠した。それから鳥のほうへ近づいたが、鳥達はそれぞれ逃げて毛

衣を取り、これを羽織つて飛び去ってしまった。一羽だけが逃げる事ができず、男はその鳥を妻にした。三人の娘が生まれ、その後、母親は娘たちに父から毛衣の在り処を聞き出させて、稲藁を積んだ下にあることが分かった。毛衣を手に入れ、すぐにそれを羽織つて飛び去ってしまった。その後、同じ毛衣を持って三人の娘を迎えに現れ、娘たちも毛衣を羽織つて飛び去ってしまった。今これを鬼車きしゃと呼んでいる。」

次に、『敦煌変文集』（以下「敦煌」）所収の羽衣説話を挙げる。敦煌（中国・甘肅省北西部の都市）には市街の南東に四一四世紀に作られたとされる美しい壁画・塑像を持つ千仏洞（莫高窟）があり、二十世紀初めにその壁から貴重な文書や仏典等が発見された。これは、一九五七年に王重民らが主だった変文を編纂したものである。長文のため、ここでは話の流れが分かる程度に概要を挙げる。（※）

《概要》

田崑崙という男が田に向かうと三人の美しい天女が水浴びをしているのを見つけた。男はそのうち末の一人の衣を盗み、妻とした。（年上の二人の天女は衣を取って飛び去っている）

田章という子を設けたが男は徴兵されたり帰つてこないで、天女は義母に「羽衣を見せてくれないか」と頼む。懇願する天女を無下にもできずに義母は衣を見せたが、天女はまだその時ではないと思い、撫でて衣を返した。それから十日も経たないうちに、天女はもう一度羽衣を見せてほしいと義母に頼んだ。義母は訝しげだったが「子どもも生まれたのにどうして離れられましよう」と言うので衣を手渡した。しかし、天女は衣を纏うと窓から外に出て行き、空高く舞い上がってしまった。天女は地上で五年間暮らしたが、天上では二日しか経っていないから。子どもを思い嘆く天女に二人の姉は「明日一緒に会いに行こう」と提案する。

田章が五歳になっていたが、母親を慕つて泣き止まずにいるのを、たまたま忍び歩きをしていた董仲先生が見つけ、田章が天女の子であることを知り、「昼頃に池に行けば母親に会える」と教えた。言われた通りに言ってみると、三人の天女がいた。天女たちも田章が来ているのを見つけ、やがて衣を翻して田章とともに天上へ昇った。

天女の父親が田章に方術やその他諸芸を教育し、地上に戻った田章はあらゆることに精通し、やがて宰相となった。

しかし、後に宮内の事件に関連して、西方の僻地へ配流の身となった。その後、天子が狩猟中に拾った身丈三寸二分の人間や同じ大きさの歯について、どの群臣も答えられず、また国中に布告しても誰一人知る者はいなかったため、田章のもとへ使者を遣わし訊ねさせると、すんなりと答えた。他にも難問をぶつけたが、苦なく返答するので、天子はとうとう田章を召して僕射（官名）に任命した。これではじめて田章が天女の子であることを知った、という流れになつてゐる。

この話の中で田章が答えた小人・大人のことは、春秋時代（前七七〇〜前四〇三年）に陳章が齊の桓公の質問に答えた話とほぼ同じ内容で、『博物志』にも同様の記述がある。この変文が長い年月を壁の中で過ごしたことと照らし合わせる、かなり古い説話である可能性が高い。ただし、敦煌の壁は四〜一四世紀に建造されたものと考えられているので、少なくとも先に挙げた『玄中記』と同年代か、その後の説話と思われる。

最後に、清時代の類書で一七一〇年に編纂された『瀕鑑類函』（以下「瀕鑑」）所収の羽衣説話を見ていきたい。ここでは、水野氏が『羽衣伝説の探求』で挙げている訳文を参考とする。（※）

南昌府の東に浴仙池という池があり、そこを一人の少年が歩いていると、五人の美女が水浴びをしているのが見えた。その美しさに感嘆した少年は、岸辺に目がくらむような彩衣が五枚置かれているのを見つけ、気づかれぬように忍び寄って一枚取って隠した。

しばらくして水浴びをし終わった美女たちが池から上がり、彩衣を纏ってたちまち雪よりも白い真白な鶴になった。天高く舞い上がったが、ひとりの女だけ彩衣がなくて一緒に飛び立てず、うろうろと衣を探していた。少年が彩衣を持って現れると、女は喜んで受け取ろうとするが少年は渡さない。仕方なく女は要求に従って妻となった。しかし女は「私は人間界に長く留まることはできません。三年経ったら彩衣は返してください」といって、三年間夫婦生活を営んだ。

三年が経つと、女は衣を返してもらい、それを身に着けるとたちまち白い鶴となつて天空に飛び去った。

「瀕鑑」は明時代の『唐類鑑』を増補し、さらに宋以後の出典を多く加筆したもので、この説話は、編纂された

当時より前時代のものである可能性がある。しかし、先に挙げた二つの説話より後代になることは想像に難くない。

ここまで中国に伝承される羽衣説話を三つ挙げたが、まずこれらに共通する事項を列挙する。

- (I) 天女が鳥（白鳥・白鶴）に転換する描写がある。
- (II) 天女の飛翔地が水辺（池・田）であり、水浴びをしている。
- (III) 飛翔する天女が複数である。
- (IV) 衣を盗まれた天女は男の要求に応じて妻となる。
- (V) 比較的長い期間地上に留まり、子を儲けることもある。
- (VI) 天女が自分の意思で衣を探し出す描写がある。
- (VII) 天女は衣を纏い、あるいは鳥に変化して天に昇る。子を連れて行くこともある。

ここで押さえておきたいのは（I）の天女が人の姿から白鳥や白鶴に転換する描写についてである。君島久子氏は論「羽衣覚書―飛翔と変身」の中で、羽衣には飛翔機能と変身機能との二機能が備わっていると述べており、天女の容姿の転換は羽衣の一機能として捉えている。

しかし、中国の羽衣説話では必ずしもそうとは言えない。「敦煌」を見ると、衣の有無に関わらず天女が転換する描写が次の文章から認められる。

崑崙向田行、乃見有三個美女洗浴。即變為三個白鶴、兩個飛向池邊樹頭而坐、一個在池洗垢中間。

其美女者乃是天女、其兩個大者抱得天衣、乘空而去（傍線部筆者）

「敦煌」では、三人の天女が白鶴に変身したのち、二人は衣を取って飛び去っている。つまり、天女の転換に衣は必要とされておらず、天女自身の能力で飛んでいるのだ。したがって、容姿の転換が羽衣の機能であるとは一概には言い難いのである。しかし、中国の天女に容姿の転換が顕著であることは、注目しておきたい。

## 二、朝鮮の羽衣説話

朝鮮には民話や口伝神話の一つとして、羽衣説話が語られている。原話を『羽衣』<sup>ウヰイ</sup>といい、「仙女と木こり」または「天女と樵夫」と呼ばれている。<sup>※4</sup>（以下「仙女と木こり」）

《概要》

金剛山のふもとで母親と暮らしていた樵は、ある日獵師に追われていた小鹿を助ける。命拾いした小鹿はお礼にと「明日金剛山に水浴びにやってくる八人の天女のうち、一人を妻としなさい。しかし、四人目の子どもが生まれるまで羽衣を返してはいけません」と告げる。次の日、言われた通りに金剛山に登ると、八人の天女が舞い降りてきた。樵はそのうちの一人の衣を取り、妻として迎えた。

二人の間には子どもが二人生まれた。天女は夫に羽衣を返してくれと頼んだが、樵は小鹿の言葉を思い出して申し出を断つた。子どもが三人になったとき、天女は「あなたに背くことはしないから羽衣を見せてほしい」と懇願した。樵は見せるだけならと衣を見せると、天女は衣を纏って三人の子どもを抱きかかえて空へと舞い上がった。また。

途方に暮れていると、小鹿がまたやって来て「どうしても天女に会いたかったら、天女が池の水を汲むのに降ろす瓢の中に飛び乗りなさい」と教えた。小鹿に教えられた通り、瓢に乗って天に行き、天帝に「妻と子どもに会わせてほしい」と頼んだ。天帝は自分の娘である天女とその子どもを引き合わせ、樵が妻子とともに天上で暮らすことを許した。

この話には後日譚がある。ある日、樵は母親に会いたいがために天馬（龍馬）を駆けて地上に降りるが、その際、天女である妻に「天馬から降りて地面に足がつくと、二度と天に帰って行くことはできない」と言われていた。しかし、息子の帰りを喜ぶ母は、樵の好物であるかぼちゃの粥を食べて行きなさいとすすめた。しかし、お粥があまりに熱くて天馬の背中にこぼしてしまった。驚いた天馬は樵を振り落ととして天空高く飛んでいってしまい、樵は二度と天に帰れなくなり、悲しく泣き暮らすうちにとうとう雄鶏になってしまった。この後日譚は羽衣説話とはまた別の要素が混ざり

あつて生じた可能性が高く、ここでは前述した部分を扱いたい。

この話の特徴を取り上げながら、中国の説話と比較していきたい。

(i) 男は小鹿の導きによつて天女のもとへ赴く。

(ii) 虹の下の美しい池で天女が水浴びしている。

(iii) 天女は人の姿をしている。

(iv) 飛翔した天女は複数である。

(v) 脱いだ衣は松の枝にかけた。

(vi) 男の妻となつた天女は、子が二人になつたとき羽衣を返してほしいと申し出るが断られ、子が三人になつたとき、再び羽衣を見せてほしいと懇願し、見せてもらった。

(vii) 天女は衣を纏うと約束を反古にし、子を連れて天に昇つていった。

(viii) 再び現れた小鹿の導きによつて、男は天に昇つた。

(ix) 天女の父である天帝の許しを得て、男は家族とともに天で暮らした。

朝鮮の説話で特出しているのは(i)小鹿の存在である。説話の中で、獵師から助けてもらつたお礼として小鹿は男に天女のことを告げている。つまり、小鹿が男の行動に働きかけ、その後にも影響を及ぼしているのである。

このことについて、漆原直道氏は「日本・朝鮮の『羽衣伝説』について」の中で、小鹿は天空神の使者としてその意志を持ち運ぶ仲立ちをしていたと述べている。朝鮮において小鹿は古くから天の使者として吉報を運ぶと言われており、尊敬の対象となつていることを見ると、こうした動物信仰の考えが伝承の中にも浸透していると思われる。

中国の羽衣説話との共通点としては、天女の飛翔地が水辺であることと、飛来した天女が複数であることが挙げられる。また、天女は自らの意思で衣を探し出す描写や夫(義母)との約束を反古にしている点も共通点として挙げられる。これらのことは、日本の羽衣説話と比較の中で詳しくは後述するとして、ここでは提示するだけに留めたい。

## 第二章 日本の羽衣説話

### 一、日本の羽衣説話

日本に伝承される羽衣説話で最も古いものとされているのが『風土記』に所収されている羽衣説話である。「風土記」とは七一三(和銅六)年に元明天皇の詔によつて、諸国の郡郷の名の由来や地形、産物、伝説などを記して撰進された地誌である。しかし、国によつて撰進された時期が一律ではなく、完本に近いものは『出雲国風土記』のみとなっている。「風土記」は平安時代や江戸時代に編まれたものもあり、それらと区別するために、奈良時代に編まれた『出雲国風土記』『播磨国風土記』『肥前国風土記』『常陸国風土記』『豊後国風土記』の五つは古風土記と呼ばれている。

まずは、これら「風土記」に表れている羽衣説話を見ていくことにする。

『近江国風土記』逸文の「伊香小江」(伊香)は、「風土記」所収されたものの中でも古い時代に位置づけられており、日本の羽衣説話の原型になつたとも言われている。

興胡よこの郷の伊香小江に降りてきた八人の神人(神仙女・白鶴に恋する)が水浴びしていると、伊香刀美が目撃し、白犬を遣つて末の一人の羽衣を盗んで妻とし、子を設けるが、神人は羽衣を探し出し天に昇つてしまったという内容である。

注目したいのは、天女が白鳥に転換することと、白犬の存在である。

白鳥に転換する描写は中国の羽衣説話に通じ、白犬の存在は動物が羽衣を盗むことに加担している点で朝鮮の説話に登場する小鹿と類似する。日本の羽衣説話の原型と捉えられている「伊香小江」に中国・朝鮮の羽衣説話の要素が含まれていることは、水野氏が言うように羽衣説話の伝播による影響を受けているからであらう。

また、説話の後半では「伊香連等が先祖、是なり」とあり、氏族起源譚として語られている。「風土記」は地誌というその性質上、このように何らかの起源譚と結びつきを持つことが多く、次に挙げる『丹後国風土記』逸文「比治の真



奈井・奈具社<sup>(※6)</sup>（以下「奈具社」）にもその傾向が見られる。

《概要》

比治の山に麻奈井と呼ばれる泉があり、そこに八人の天女が降りて水浴びをしていた。ある日、老夫婦がこの泉に来て一人の天女の衣を隠した。衣を取られた天女は天に帰れなくなり、老夫婦の娘となった。

天女は酒を醸し、それで得た財を家に送っていたが、ある日突然家を追い出される。長く地上に留まっていた天女は天に還ることもできず、やがて奈具の村に至り、豊宇加能売として鎮座したという。

この説話では天女が男の妻になるのではなく、老夫婦の娘になるという展開を見せている。所々に地名起源譚があり、最後には穀物の神である豊宇加能売の起源と天女が結びついている。また、老夫婦を通して、人間の身勝手さや醜悪さが目立っているのが特徴である。

最後に、『駿河国風土記』逸文の「三保松原」を見ていこう。ここでは原文は短いので全文を引用する<sup>(※7)</sup>。

風土記の案ずるに、古老伝へて言はく、昔、神女あり。天より降り来て、羽衣を松の枝に曝<sup>さら</sup>しき。漁人、拾ひ得て見るに、其の軽く軟<sup>やほらか</sup>きこと言ふべからず。所謂六銖の衣か、織女の機中の物か。神女乞へども、漁人興<sup>あは</sup>へず。神女、天に上らむと欲へども羽衣なし。是に遂に漁人と夫婦と為りぬ。蓋し、巳<sup>や</sup>むを得ざればなり。其の後、一旦<sup>あるひ</sup>、女羽衣を取り、雲に乗りて去りぬ。其の漁人も亦登仙しけりと云ふ。

以上「風土記」に所収された羽衣説話だが、どの説話も「古風土記」と同時期であるかは明らかになっていない。特に「三保松原」は奈良時代に三保という地名が確認されていないことと、原文に「風土記の案ずる（風土記を見ると）」と前置きがあることから古代の風土記の記事を做つたものと言われており、「古風土記」と同時期とは認められていない。しかし、風土記に所収されたこれらの説話が日本の羽衣説話における最古のものとするに疑いはないだろう。

三保松原を舞台とした羽衣説話は芸能の分野にも伝承されている。室町時代に成立したとされる「謡曲羽衣」<sup>(※8)</sup>（以下「謡曲」）は、早春の三保の松原で漁夫の白童が美しい衣を見つけたところから語られている。また、作中で詠まれている歌は「奈具社」において天女が嘆き詠んだ歌「天の原 振り放け見れば 霞立ち 家路惑ひて 行方知らずも」に基

づき、「天の原　ふり放け見れば　霞立つ　雲路まどひて　行方知らずも」と詠まれている。

白竜が衣を持つて帰ろうとすると天女が現れて、それは自分のものだから返してほしいと懇願する。白竜は国の宝にするといつて返そうとしないが、羽衣がなくては天に帰れないと嘆き悲しむ天女の姿を見て不憫に思い、天人の舞楽を見せられるのなら、と羽衣を返すことにする。天女は優美な舞曲を披露しながら富士の高嶺へと舞い上がり、やがて霞に隠れて見えなくなつた。

「謡曲」で注目しておきたいのは、白竜が衣を返さない理由を述べたところと、もう一つは天女に羽衣を返すところの二人の問答である。

さもあらば末世の奇特に留め置き、国の宝となすべきなり。

【そうであるなら、末世の奇瑞として地上に留め置き、国の宝とすべきである】（※7／三八三頁）  
いやこの衣を返したば、舞曲をなさでそのままに、天にや上り給ふべき。

【いや、この衣を返したなら、舞を舞わずにそのまま、天にお上がりになるのではないか】

いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを

【いいや、疑いというのは人間だけにあるものです。天には偽りというものはありません】（同／三八五頁）

末世とは道義の廢れた時代を指し、白竜は衣をその時代に現れた吉兆の象徴として捉えていることが分かる。つまり、白竜は今自分がある世界が荒廢しているという認識を持つていたことになる。

また、疑念は人間だけにあるもので天には存在しないという言葉は、先に挙げた「奈具社」でも天女は「天つ人の志は信を以ちてもとせり」とし、老夫婦も「疑多く信なきは率土の常なり」と語っていることから、天人や地上人の捉え方に類似性が見受けられる。天は誠を根本に据えているのに比べて、地上は疑念が多いという考えが示されている。

芸能として伝承されている羽衣説話にはもう一つ、組踊「銘苺子」がある。組踊は台詞・歌・舞踊から成る琉球古典劇で、「銘苺子」は玉城朝薫（二六八四〜一七三四年）が創作した朝薫五番に数えられている。組踊は冊封使を歓待する目的で冠船芸能として成立し、そこには清への祝儀にかなうように作品化されている。朝薫五番はその大半が琉球の故事を

題材に作られており、「銘苺子」も故事「銘苺子伝説」を参考にしたと言われている。

銘苺子はある日、川の近くの松を見ると、辺りが不思議な光と芳しい匂いに満ちているのに気づく。しばらく様子を伺っていると、それは天女が水浴びをしているためだった。銘苺子は松に掛けてあった羽衣を隠し、天に帰ることができなくなった天女はやむなく銘苺子の妻となる。二人は一女一男を設け、天女は母としての生活を送っていたが、子どもたちが歌う童歌から羽衣の在処を知って天に帰ってしまう。その後、琉球王府から使いがやってきて子どもたちの取り立てと銘苺子への位階を約束して大団円となる。

「銘苺子」の後半部分は冠船芸能としての性質上、清への祝儀性を表すとともに琉球王府の威信を示すように、作品の中に意識的に王府を関与させているが、天女が飛来し、男が妻として留め置いて子を設け、やがて天女は羽衣を見つけて天に昇っていくという羽衣説話を持つ体系は整っている。ここで注目しておきたいのは、銘苺子が天女に自分の妻になるよう説き伏せるところと、天女が羽衣を見つけ昇天する際に二人の子どもを置いていくことに苦辛する場面である。

天女詞 里や物知らぬ 天と地の情 ふやあはちど生たる 松も玉水も 我が物と言ふすや 無理やあらね

【あなたは物をご存じない。天と地の情けが和合して生まれたものなのに、松も玉水も自分の物とは無理ではありませんか】

銘苺子詞 天と地の情 ふやあはしゆる浮世 無蔵と縁結で 互にそはに

【天と地の情けが和合するのが浮世。あなたと縁と結んでたがいに寄り添いたい】（※8／三〇四〜三〇五頁）

天女詞 里がい言葉や 此世界の習ひ 天の御定の わ自由ならぬ

【あなたの言葉はこの人間世界の習いです。天の掟は私の勝手にはできない】

銘苺子詞 世界のよす事や 誰がしちがや初め 天の御掟と 世界の習ひ

【この世界の教えは誰が制定したか、初めは。天のおさだめこそこの世界の習いである】（同／三〇六頁）

天女詞 なし子もり素立て をらんでやりすれば 天の御定の わ自由ならぬ

【できた子どもを育てて、いつまでもいてやりたいが、天の掟は私の思うようにはならない】  
ねなしちをるうちに 別れらなきやしゆが おぞで百すがり すがると思は

【寝ているうちに別れなければどうする。目を覚ましてひたすらにとしすがり、すがるかと思うと】

これ迄よと思は 飛びも飛ばれらぬ なし子ふやかれの 百の苦ししや

【これまでと思うと飛ばうにも飛ばない。わが子との別れのひたすらなる苦しきよ】（同／三〇八／三〇九頁）

自分の妻になるように説き伏せようとする銘苺子は、天女が「松も玉水も天地が和合して生まれたものだ」と言ったことに對して「ならばあなたと私が一緒になるのは道理である」と意図的に天地の理を曲解して論点をずらしている。追いつめられた天女は遂に折れて妻になることを承諾してしまう。ここには、銘苺子を通して人間の意地汚さが書き表れている。

また、羽衣を見つけたことで天に昇らなくてはならなくなった天女は、子どもを置いていくことを躊躇っている。天女は結局子どもを置いていくのだが、この点は中国の羽衣説話「姑獲鳥」「敦煌」、また朝鮮の「仙女と木こり」で子どもを天に連れて帰った天女との違いが生じている。詳しくは次節で述べていきたい。

## 二、中国・朝鮮の説話との比較

中国・朝鮮と日本の説話を比較していくと、天女と子どもの別れ際の描写に顕著な差が表れている。中国・朝鮮の説話で天女は天に帰る際、自身の子どもの連れて昇っている。しかし、中国の天女にはある特徴が見られる。

後衣<sup>レ</sup>以迎<sup>三</sup>三女<sup>一</sup>、三女兒得<sup>レ</sup>衣亦飛去。（姑獲鳥）

不須乾啼濕哭、我明日共姉妹三人、更去遊戲、定見。

三箇姉妹遂將天衣、共乘此小兒上天而去。（敦煌）

中国の天女は天に昇る際、その場では連れていかず、再度地上に降りて子どもとともに天に昇る。なぜ天女は子どもを迎えに来たのか。これには、中国の説話「姑獲鳥」が影響していると私は考える。

第一章で示した通り、姑獲鳥は子どもを攫い養育するという、妊婦が死んで化した怪鳥である。姑獲鳥の伝承は古くから残されており、一般的に広く知られていたと考えられる。姑獲鳥の子どもを攫うという特徴が、羽衣説話の中に取り込まれたのではないか。その特徴を強調するように、天女は一度天に帰ってから、まるで夫の下から攫うように子どもを迎えに再びやって来ている。また、『玄中記』のように姑獲鳥の伝承が予章郡の話と融合して伝承されていることもあり、羽衣説話に取り込まれる要因は十分にあったと考えられる。

これに対して、日本ではそもそも天女と男の間に子どもを設けるのは「伊香小江」と「銘苺子」のみに見られ、しかも子どもは地上に残されて天女だけが去っている。特に「銘苺子」では前述の通り、子どもとの別れ際に天女が躊躇している描写が見られる。天女自身、我が子との別れに苦しさを感じていることから、母親としての心の動きが表れている。

しかし、日本では、それでも「天の掟は私の思うようにならない」、だから子どもを置いて天に昇らなければならぬという論理がここで生じており、中国のように再び迎えに来ることはない。このように日本では掟や理に縛られる天女の姿が描かれており、次に挙げる事項にもその傾向が表れている。

それは中国・朝鮮の天女が羽衣を取り戻す際、約束を反古にしているのに対して、日本の天女は一度口にした言葉を違えることはない点である。

中国では、羽衣を見せたら自分を棄てていくのではないかと質した義母に、朝鮮では見るだけならと羽衣を差し出した夫に、天女はそんなことはしないと断りながら天に昇ってしまった。しかし日本ではそのような描写は見られず、逆に志や約束に対して誠実を貫いている。

老夫、曰はく「天つ女娘、何にそ欺く心を存てる」といふ。天つ女、云はく「それ、天つ人の志は信を以ててもととせり。何そ疑ひの心多くして衣と裳を許さざる」といふ。老夫、答へて曰はく「疑多く信なきは率土の常なり。

故、この心を以ちて許さずあり」といひ遂に許せり。(「奈具社」)

妾は私意を以ちて来れるには非らじ。こは老夫らが願へるなり。(「奈具社」)

ワキ 「いやこの衣返しなば、舞曲をなさでそのままに、天にや上り給ふべき。

シテ 「いや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものを。」(「謡曲」)

「奈具社」は天女が老夫婦の望みを承諾する代わりに衣と裳を返してほしいと懇願した場面で、「謡曲」は羽衣を返してくれたら舞曲を披露するという天女に白竜が疑いを持つた場面である。どちらの天女も疑念を抱き不信任を募らせる人間に対して、一度約束したことは守る姿勢を見せている。これは掟や理を破ることができないという日本の天女の特徴が延長されて、約束を破らない、あるいは破れないという天女の人格が形成された結果ではないかと考えられる。これら大きく二つの相違点、子どもを置いて天に昇ることと約束を違えないというのは、そのまま日本の羽衣説話の特徴となつている。どちらも掟や理に逆らうことのできないという日本独特の天女像が表れている。

### 第三章 日本の羽衣説話における天女像

#### 一、人間との対比

日本の羽衣説話では、天女像と対比させるように人間の人格・キャラクターについて言及しているという特徴がある。第二章で挙げたように「謡曲」では人間が自分たちの世界を荒廃していると考え、「銘苅子」では天地の理を曲解し、天女を手に入れようとする人間の姿が描かれている。

このような人間の意地汚さが最も書き表れているのは「奈具社」である。老夫婦が「疑多く信なきは率土の常なり」と語り、疑念を持つのは当然としていることは前述したが、それ以外にも人間の内面を曝け出している描写が見られる。後に老夫婦ら、天つ女に謂りていはく「汝は吾が児に非ず、暫く借りて住めり。宜早く出て去きね」といふ。ここ

に天つ女、天を仰ぎて哭働き、地に俯して哀吟き、即ち老夫らに謂りてはいはく「妾は私意を以ちて来れるには非らじ。こは老夫らが願へるなり。何にそ厭悪の心を発し忽に出去之痛あらむ」といふ。老夫、増発瞋りて去くことを願ふ。(奈具社)

天女を我が子にと望み、半ば強制的に従わせておきながら富を得た途端、「お前は我が子ではない。少しの間住まわせていただけだ」と一方的に天女を追い出し、継る天女に対して怒りを露わにしている。用済みとばかりに天女を見捨てた老夫婦は、意地汚いというより醜悪でさえある。なぜ、人間がこのように描かれているのか。

その理由として、天女の人格を際立たせるために意識的に変形された姿ではないかと私は考える。

前章で日本の天女には掟や理に縛られるという特徴があったが、自分の自由に行動できず、束縛される姿というのは弱々しく儂いイメージを彷彿とさせる。その人格を強調するために人間はあえて醜悪に描かれているのではないか。また、羽衣を奪われ弱みを握られた天女が人間に従わざるを得ない状況に追い込まれ、屈服している姿が次の文から窺える。

妾独人間に留まりぬ。何か従はずあらむ。請はくは衣と裳を許したまへ」といふ。(奈具社)

是に遂に漁人と夫婦と為りぬ。蓋し、已むを得ざればなり。(三保松原)

玉水にほれて 飛衣取られ にやまた自由ならぬ 里になれら

【玉水に気をとられて羽衣をとられ、もはや思うようにはできない。あなたに身を任せましょう】(銘苅子)

これらのことから、人間の醜悪さを描くことよって日本の天女が人間よりも弱い立場に追い立てられていることが分かる。それが逆説的に、天女に対して弱々しく儂げな印象を強く持たせているのではないかと考えられる。ここに日本人が抱く天女像のイメージを窺い知ることができる。

## 二、日本における天女像

日本の天女像を捉えるにあたって、注目しておきたいのは天女の変身の問題である。

中国の羽衣説話では、天女がその容姿が人から鳥へ、あるいは鳥から人へと転換する描写が顕著であることを第一章で挙げた。中国の説話は白鳥処女説話の流れを汲んでいることからこのような描写が見られるのは理解できるが、日本の羽衣説話ではそのような転換の例は少ない。この天女の描かれ方の違いはなぜ生まれたのか。

日本で人から鳥への転換が見られるのは「伊香小江」のみである。

天の八女、俱に白鳥と為りて、天より降りて、江の南の津に浴みき。…（中略）…往きて見るに、實に是れ神人なりき…

ここではたしかに人の姿から白鳥の姿への転換が見られる。しかし、これ以上の変身に対する言及はなく、話の流れにおいて重要視されていない。では、日本の天女はなぜ変身を重要視していないのか。

変身しない日本の天女の容姿は、人間と大した差は見られない。唯一違うのは、羽衣を纏い空を優雅に舞うその艶姿だ。

これとよく似たものに、仏教芸術の「飛天」がある。飛天とは、仏教において諸仏の周囲を飛行遊泳し、花を散らし、音楽を奏で、香を薫じて礼賛する天人のことで、「謡曲」の中ではこの飛天を彷彿とさせる天女の登場シーンも見られる。（原文は後述↓天女の飛翔地へ）

飛天の起源はインドと言われているが、オリエントに伝わる有翼天人像がシルクロード経由で伝来したという説もあり、はつきりしたことは分かっていないが、日本には中国を介して伝来した可能性が非常に高い。

日本に残る仏教美術作品として法隆寺金堂壁画や薬師寺東塔水煙、平等院鳳凰堂後背、法界寺阿弥陀堂壁画などに衣を纏い舞う飛天の姿が描かれている。このように多くの作例が残されていることから、飛天の姿は広く一般的に知られていたものと考えられる。

こうした衣を纏い飛行遊泳する飛天像や飛天図は、古代日本人が持つ天人に対する基礎的イメージへの影響を与えたことは無視できない。このような飛天像の視覚的影響が羽衣の変身機能の喪失を招いたと考えるのは、解釈の範囲内だ



ろう。さらにこうした容姿のイメージが天女像の固定化を促していったと思われる。

天女像を語る上で、もう一つ注目していきたいのは天女の飛翔地である。

日本の羽衣説話では、天女の飛翔地を美しく語る描写が多く見られる。

この里の比治の山の頂に井あり。その名を麻奈井といふ。(奈具社 ※麻奈井↓美しい泉や井戸のことを指す。)

われ三保の松原に上り、浦の気色を眺むるところに、虚空に花降り音楽聞こえ。靈香四方に薫す。これた、事と思

はぬところに、…(謡曲)

あの川の本に 天と地に光り さしまわてからに かばしや匂だかさ しぢやの事ならぬ (銘苅子)

天女が飛翔する場所は、美しい泉であったり、この世とは思えないほど幻想的な雰囲気が漂っている。そこに現れる

天女は当然、美しい女性が想像される。「謡曲」や「銘苅子」の描写では、天女が現れたが為にそのような光景になつ

たとも考えられるが、芳しい空気を生み出しているのが天女、だということ、それに見合った容姿が想像されるだろう。

衣を纏い飛翔する姿や、現れる場所が美しく幻想的に描かれていることは、天女の美しさと神秘性を高めている。ま

た、掟や理に縛られ自分の思い通りに行動できないことや一度約束したことを守ろうとする姿勢は、天女の内面の健気

さや純粹さを語るには十分である。

これらの描写は天女が存在を際立たせ、作品を彩っている。日本の羽衣説話に登場する天女がこのように描かれているのには、作者あるいは伝承してきた人々が天女に対して何らかの思い入れがあったのではないか。

### 三、天女像に反映されたもの

作者や伝承してきた人々が天女にどんな思い入れがあったのか。

これまでの日本の天女の描かれ方を見ていくと、作品の中で天女は、天界の住人という異質な存在であるという神秘性が窺える。衣を纏い飛翔する美しさや幻想的な雰囲気語られる飛翔地は、まさにそれを強調している。しかし、そ

れと同時に、人間に組み敷かれて掟や理に縛られる弱く儂げな姿や人間との対比によって際立つた誠実性は、天女の内に邪欲・私欲が無く清らかであることを示している。

このような天女の描写は、日本人が抱く《天》への尊敬と羨望の表れではないかと私は考える。

日本の羽衣説話の中で、天は神または天人が住まう清浄な世界と捉えられている。逆に、人の住む世界は荒廃しており疑念が多いことは当たり前という認識を持つている。日本人は天女を通して天人に邪欲がなく神聖な存在であることを語り、自分たちの住む世界を貶めることで天に対して尊敬の情を表していたのではないか。また、それと同時に、清浄な世界である天に憧れを抱き、その世界を手に入れてみたいという願望があったのではないか。人間に屈服する天女の描写は、まさにその願望の表れを物語っている。

しかし、多くの天女は羽衣を取り戻して天へ帰還を果たしている。一度は無理に手に入れることができても、最後には天女の帰還を許していることから、手を出してはいけない不可侵の領域として、天という高次元の存在に畏怖の念を抱いていたのだろう。

## まとめ

日本の羽衣説話は中国や朝鮮の羽衣説話の要素が作中のそこかしこに含まれている。伝播経路の影響が考えられるということはすでに示したが、中国・朝鮮・日本の羽衣説話を比較してきて、予想していたよりも多くの共通項を見出すことができた。しかし、それと同時に浮かび上がった相違点は、日本の羽衣説話の特徴そのものに重なっていた。

特に天女の描かれ方には顕著な差が見られた。日本の天女は衣を纏い飛翔する姿や飛翔地の美しさを語ることでその容姿の神秘性を高め、中国・朝鮮の天女が子どもを迎えに来るのに対して、日本の羽衣は掟や理に縛られ、また一度口にした約束を反故にすることはないという誠実性を併せ持っている。

こうした日本の天女の描かれ方には、天への尊敬と羨望が表れていると私は考えた。天女という虚像を通して、見る

ことの叶わない天への想像を巡らせ、思いを馳せていたのかもしれない。

羽衣説話は世界中に分布し、その類型と呼ばれるものも多く存在する。その中でも日本は様々な伝播経路の影響を受けながらも独自に変容を遂げていった。ここで示した考察が今後の羽衣説話の研究に少しでも役立てれば幸いである。

《参考文献》

- ※1 竹田晃・黒田真美子編『中国古典小説選 搜神記・幽明録・異苑他（六朝I）』明治書院 二〇〇六年
- ※2 王重民ほか選『敦煌变文集 卷八』人民文学出版社 一九五七年
- ※3 水野裕著『羽衣伝説の探究』産報（サンポウブックス） 一九七七年
- ※4 黄 江著・宋貴英訳『韓国の神話・伝説』東方書店 一九九一年
- ※5 秋本吉郎編『風土記 日本古典文学大系2』岩波書店 一九七二年
- ※6 植垣節也編『風土記 新編古典文学全集5』小学館 一九九八年
- ※7 小山弘志ほか『謡曲集① 新編日本古典文学全集58』小学館 一九九七年